

## 中学部における社会科指導

藻利 國恵

本校中学部の教科学習では、幼稚部・小学部で培われた日本語の力を更に伸ばし、学年相応の基礎学力を獲得させることを目標にしている。生徒の個人差に配慮し、一人一人の学力を伸ばす努力をしている。生徒は発達段階が思春期前期ということもあり、自己主張が強く、親や教師に反抗する等、激しく変化する時期でもある。心がゆれる生徒たちも親や教師に認められ、自信がついて内面が成長すると、勉強や部活動等にも意欲が高まるようになる。乳幼児期から始められた、人との愛情深い関わりの中で豊かな心と言葉を育てるという教育の基盤は、中学部の教育においても通ずるものであると考える。中学部の社会科指導では、他の教科指導同様、授業を行う際に、学習内容の理解度、興味・関心事、経験等を把握することで、生徒の学習意欲を喚起し、生徒自らが考え、理解し、納得する授業展開をしたいと考えている。ここでは、社会科で私が日頃行っている取り組みの中で大切にしていることを述べたい。

【キーワード】 授業における学び 個人差への配慮 個別ノート 実物の活用

### 1 はじめに

#### (1) 社会科という教科の特性

生徒が「社会科は暗記教科である」と捉えるならば、それは受け身的な学習になっていることが多い。中学校社会科には地理・歴史・公民の3科目があり、人間の営みを学ぶものである。地理は人間が自然に働きかけ生活する営みを、歴史は過去の人たちの行動の足跡を、公民は現代の世の中のしくみを学び、社会は常に変化していることも学ぶ。

#### (2) 本校中学部における社会科の特性

本校中学部社会科においても対応の教育を目指し、学力やコミュニケーションの面で支援を要する生徒に配慮しながら取り組んでいる。教師は例えば「オランダのポルダー」「平城京と国府」等の概念の意味をイメージできるようみ砕いて伝えるため、言葉でのやりとりや視覚教材等を効果的に活用する工夫をしている。題材そのものをよく理解したうえで、身近な実物、生徒が体験したこと、関心を持っていること、世間で話題になっているできごと等を動機づけとして学習内容に結びつけている。社会科全体の中での位

置づけや他教科との関連も生徒の実態に即した内容になるよう意図した指導を行っている。

総合的な学習の時間での取り組みの成果を、次年度の生徒の社会科教材として活用する事もある。具体的な取り組みとしては、博物館との連携による地域学習「土器を学ぼう」「下総国府を学ぼう」等がある。専門家による本物にふれる体験学習は、学ぶことは奥が深くて楽しいと思えるものである。一斉指導では、言語面で配慮を要する生徒も他の生徒の発言に触発され、考えを深められたり新たなことを知ったり学び方を学んだりできる。

社会科には、生徒本人なりのものの見方や世界観の石垣を築いていく面白味がある。

### 2 授業における学び

表1のように、感情は学びの根源であると考えするため、中心部に位置する。生徒が授業を通して、「楽しい」「大変だな」等や中学生らしい正義感や潔癖、反感等の感情が揺さぶられた時に、内容を理解し記憶していくものであると考える。その領域が知識・技能

である。それをもとに「なぜかな?」「どうしてだろう?」等疑問を自ら抱き、考えたことを言葉で伝えたり書いてまとめたり、調べたりする経験の積み上げが思考・判断・表現の領域になる。これらの学びが学力の向上につながると考える。

### 授業における学び

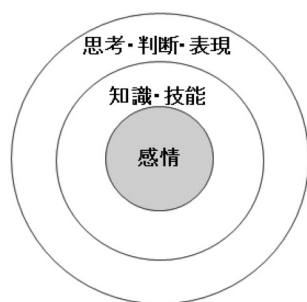


表1 授業における学び

### 3 学級経営や教科指導で配慮すること

- ・生徒にとって学びやすい授業、生活しやすい学級づくりをすること
- ・生徒自身が成長していると感じられるように評価をしてあげること
- ・何でも自由に恐れなくてもものが言える雰囲気をもつ学級であること

表2 学級経営や教科指導で大切にしていること

社会科は、一斉指導で行い集団の中で個人差に配慮するよう努めている。上記の内容は私が学級経営や教科指導の中で大切にしていることである。

「生徒にとって学びやすい授業、生活しやすい学級づくり」とは、配慮を要する生徒にとって分かりやすい授業なら、他の生徒にも分かりやすい授業になると考えている。「生活しやすい学級づくり」は、安心して仲間を大切に思える学級、友だちの良いところを見つけ合い伝え合うことができる学級のことである。

「生徒自身が成長していると感じられるように評価をしてあげる」は、例えば、頑張りが見られた時には、今までやって来たこと、やっていることを肯定し自信をもたせ、目標につなげさせていけるように支援することである。配慮を要する生徒の発言内容や黒板の内容を授業につなげていくと、周りの生徒たちが触

発され授業に集中するようになる。

生徒には「学校は失敗するところ。失敗して良いのよ。そのために先生がいるんだからね。学校はちゃんとした大人になるための練習をするところよ」と言う。驚いた顔をする生徒は少なくない。「自由に恐れなくてもものが言える」教育環境であるならば、安心感がふくらみ、意欲的に取り組むことができる。生徒は、生徒同士のつながりの中で成長していくものである。

### 4 社会科学習指導上の工夫

#### —教材・教具を活用した実践例—

次の表は、実践例をまとめたものである。

(1) 視覚的な情報から意味を読み取る	①地図を読み取る②リアルタイムな情報を得る③生徒の目線に合わせる④位置を明確にする⑤地図をフリーハンドで描く⑥グラフを読み取る⑦実物を活用する
(2) 具体的な情報を用いて抽象的な情報を読み取る	教材の提示の仕方を工夫する
(3) 抽象的な言葉を理解する	①生の声を聞く ②生徒がインタビューする
(4) 読み取る視点を明確にする	①資料を単純化する②歴史人物カードにまとめる
(5) 生活体験から得た知識を活用して思考力を育む	①修学旅行で京都へ行く ②ふるさとをみんなに知ってもらう
(6) 重要な言葉を抽出する	①教科書から重要な情報を抜き出す②タブレットPCで新聞記事を読む

表3 実践例の見出し

#### (1) 視覚的な情報から意味を読み取る

##### ①地図の読み取りカードを活用する

社会科の授業では、地理だけでなく歴史や公民においても地図は活用する。地理学習の基礎基本は地図に慣れることであり、中学生に空間認識を育てるためである。6つの大陸と3つの海洋がインプットされ、大まかな世界地図を頭にイメージできることが求めら

れている。

そこで、地図を見る時は「読み取り方」を教えるから「読み取りなさい」と指導している。方位や位置（世界地図のどこに位置するか）を取り上げ、確認することから始める。次に、図1のように掛け地図は、高低によって色が異なること、例えば、山地は茶・平野は緑・河川は青とルール（決まり）があることを教え、色別に文字に置き換えたカード（地図の読み取りカード）で示した。生徒によっては、「右側の方が分かりやすい」と答える。形を認識することが苦手な生徒には、色別だけで区別した右の方が理解しやすいようである。地図の色とルール（決まり）を示すカードの色を一致させると、「地震のあったネパールって高い山のある国だったんだ」と気づく生徒はたくさんいた。ルールの示し方にも理解しやすい方法と理解しにくい方法があることが分かる。生徒の特性に合った関わり方で理解力を伸ばしたい。



図1 地図の読み取り方を学ぶ

## ②リアルタイムな情報を得る

地理の授業で「世界の人口」を学習する時に、インターネットのリアルタイムを活用する事例である。「世界の人口」を検索すると、米国勢調査局と国連データからの推計が表示される。「世界の人口は増えているか、減っているか？」の質問に予想は半々に分かれていたが、授業時間内だけでもどんどん増えていくことに驚き、「人口が増え続けると食糧難になるのではないか」等将来への不安を言う生徒もいた。このような意外性のある情報は、生徒の学習への動機づけになる。他の例として、公民の授業で「財政赤字」を学

習する時に、インターネットで「リアルタイム財政赤字カウンター15」を検索すると日本全体の債務残高がリアルタイムで表示される。

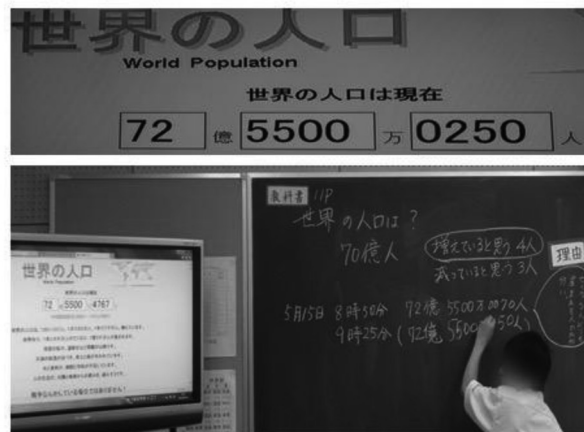


図2 世界の人口をリアルタイムでみる

## ③生徒の目線に合わせる

地理の授業では、「国境」を学習する時に、教室にある移動黒板を水平にし、生徒の目線の高さにする。図3のように電子黒板に映したヒマラヤ山脈の写真の前にジオラマを置くと、見比べたりさわったりしながら「山の裏側に違う国がある」と言う生徒がいた。ジオラマで世界がつながっていることを実感したのである。山脈を例に、国境とは国と国の境であるという概念をかみ砕いて理解させるための具体的な手だてとなる教材である。実際の光景を見ているような感じを楽しませたいものである。



図3 尾根の向こう側は外国であることを実感する

## ④国の位置を明確にする



生徒は、言葉の意味を辞書で調べるように、国名が出てきた時、必ず地図帳で確認するようにしている。図4のように地図上に印をつけると、学ぶ対象国(カンボジア)の形と位置が明確になる。生徒が分かりやすい方法として提案してくれたものである。



図4 カンボジアの形と位置がわかる

#### ⑤地図をフリーハンドで描く



図5 地図を描く

聾学校では空書という方法を取り入れることがある。黒板のないところ、野外活動の時等、ポイントになる重要な言葉を空書する。黒板があっても話の流れを止めたくない時には空書することがある。地図の場合は、形と位置がイ

メージでき記憶として残り

やすいように一斉に地図を空でなぞる活動を取り入れている。

#### ⑥グラフを読み取る

ア グラフは単純化された内容のものを扱い、読み方を知る

グラフを読み取る力は、段階的につけていくようにしている。まず、グラフを読み取る手順(図6のグラフでは、タイトル・出典・年度・数値の読み取り)を教え、単純化されたグラフから読み取るようにする。雨温図の読み取りも縦軸・横軸の読み方から始め、気

温と降水量から地域の特徴を理解していく。(図7)

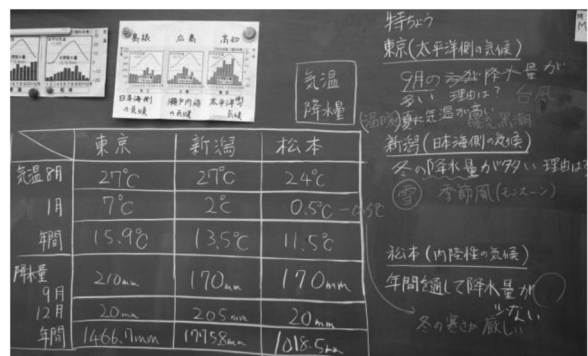
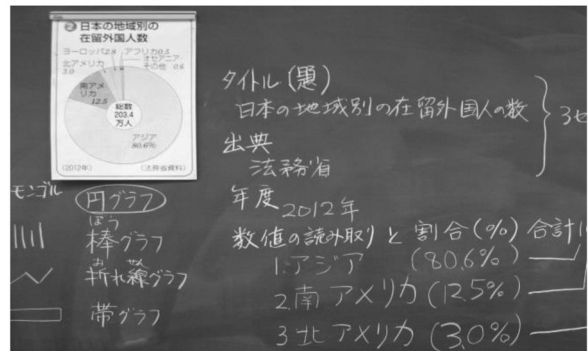


図6・図7・図8 グラフの読み取り

イ 予想とその理由を考えてからグラフを読み取り、思考する

グラフは読み取り方を繰り返し練習することで読み取れるようになっていく。思考力を高めるために、図8のような取り組みをしている。始めに題(海外に住む日本人数)から多い国を予想し、その理由を書く。次に項目に添ってグラフを読み取り、最後にまとめを書く。まとめの文は自分の考えを表したり、自分の考えと他者の考えとを比較したりしながら、自分の考えを見つめ直す機会にしていける。生徒の思考過程に合わせた内容のワークシートを用いることは効果的である。



### ウ 学習したことを手がかりに予想し考える

公民の授業で『国際貢献について考える』をテーマに、「援助をされる側」としてカンボジアを扱った事例である。図9のグラフは、授業の流れを決める重要なグラフである。生徒は、折れ線グラフから「カンボジアは人口が減っている」ことを読み取り、理由を予想し、考える。以前に学習した「カンボジアはポルポト政権によって不幸な時代があった」ことを思い起こした生徒の発言を手がかりにし、カンボジアの国情が「援助をされる側」であることを理解する。

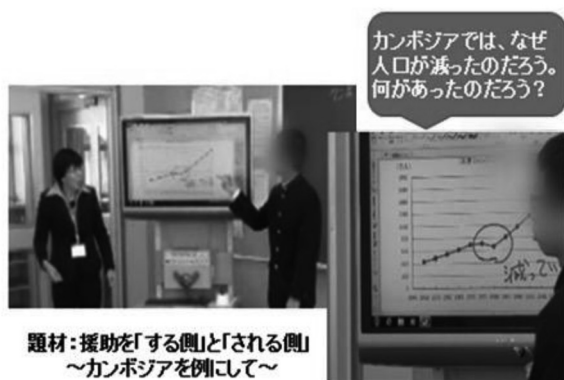


図9 人口が1970年後半に急減少したことを読み取る

### ⑦実物を活用する

～みて・さわって・においを嗅いで学ぶ～

#### ア シラス灰と校庭の土を比べる

鹿児島県や宮崎県には、火山灰が積もって造られた台地が広がっている。シラス灰と校庭の土に直接ふれながら、コミュニケーションが活発に行われる。「火山と共存して生きる南九州の人々の暮らし」を具体的に想像したり推測したりする手がかりとし、理解を深め、思考を促すことができる教材になる。



図9 鹿児島県から取り寄せた火山灰にふれる

#### イ 縄文土器にふれる

学校周辺から出土した縄文土器の土器片にふれる体験は、縄文時代の人々の生活と環境を理解する助けとなる。「この骨は何の骨ですか?」「土器の中にさらさらしたものが入っているのはどうしてですか?」等、生徒は興味や関心を示し、疑問をもつようになっていく。この疑問に沿った細かい対応を大切にしたいと思うところから「専門家に質問しよう」という次の学習へと発展していく。聴覚障害児教育において、実物の活用は具体的で理解しやすい重要な教材である。さわることで感覚を動員して体感し、自分で想像や創造し生命にふれる学びを体験する。



図10 学校周辺から出土した縄文土器

#### ウ 縄文土器の文様のつけ方を学ぶ

「縄文土器の文様はどのようにしてつけるのですか?」という生徒の疑問に専門家（和洋女子大学文化資料館駒見和夫氏）が次のように答えた。「文字のない時代の人々は君たちと同じように悲しい気持ち、いやだなどと思う気持ち、嬉しい気持ち、いろんな気持ちを土器の文様に表現していったのですよ」と。それを聞いた生徒は想像の世界を広げて行く。専門家の知識を借りることでどんどん学習の内容を広げ深めていくことができる。聴覚に障害のある生徒に配慮した支援を得て、エデュケーターとしての専門家の役割の大きさと大切さを思う。地域の歴史を学ぶと日本の歴史も見えてくる。総合的な学習の時間を活用して学んだ「縄文土器について学ぼう」の学習は、自作デジタル教材を作成し、図11・12のように下級生の教材としたり他の聾学校へ貸し出す教材としたりしている。



図 11 縄文土器の模様のつけ方を学ぶ

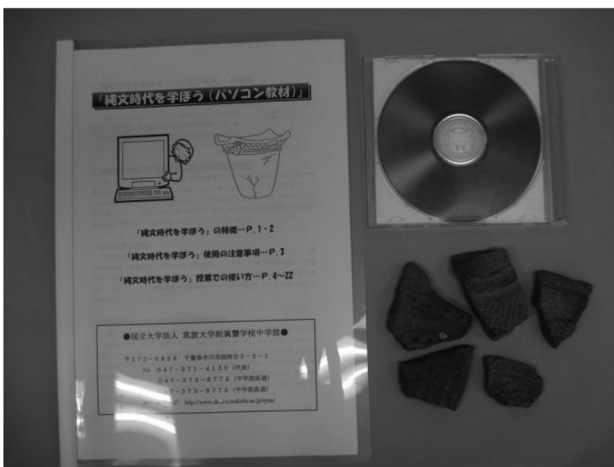


図 12 自作デジタル教材・授業活用の手引き・土器片セット

## (2) 具体的な情報を用いて抽象的な情報を読み取る

地球儀ソフト(Google Earth)で景観写真を見せ、さらにジオラマで具現化させた。掛け地図→景観写真→ジオラマへと丁寧にスモールステップで地図の読み取りを試みた。(図 13) ジオラマは、「みかん山」を理解するための教材として活用した。ところが生徒 A は、電子地図で混乱してしまった。地図が動くし、掛け地図と色が異なるからである。この場合、生徒 A には電子地図は使用しない方が良かったようである。さらにジオラマでオレンジ色に散りばめた山が「みかん山」であることが認識できず、友だちに「A ちゃんここだよ」と教えてもらった。そこで生徒 A には、図 14 の実物の写真を見せると、「ああ」と納得した。実物の写真の提示がジオラマで抽象化することができる手がかりとなった。このように生徒により認識に違いがあるため個人差に配慮した教材の提示

の仕方が必要となる。



図 13 地図の提示のしかた



図 14 実物の写真「たわわに実ったみかん」

## (3) 抽象的な言葉を理解する

### ① 生の声を聞くことで過疎化がすすむ様子を実感する

「過疎化」という抽象的な言葉を理解させるために、高齢者を登場させた。図 15 (教師が取材をもとに作成したプレゼンテーション資料の一部)のように生徒たちは、生の声を聞くことで、過疎が進む様子が生活臭を持って実感でき胸にすんと落ちるところがあるようだ。日本一高い米価を誇るブランド米「こしひかり」の産地でさえ過疎化がすすむ現状を知り、日本の農業の将来をも案じる声が多く出された。一方、生徒の暮らしの中で、普段高齢者に出会っても通り過ぎる存在である場合が多いが、このように高齢者を登場させ、笑顔で生徒に語りかけることは意味があると思う。学習前と学習後では、高齢者に出会った時の印象が変わるところがあるのではないだろうか。高齢者を生活者として捉え、イメージに広がりやすくなったと思われる。「分かる」「共感できる」等の心の動きを体験さ



せたい。

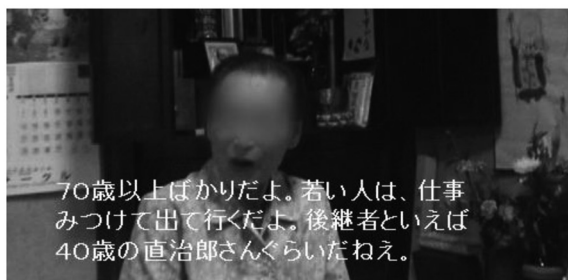


図 15 稲作農家（新潟県中魚沼郡津南町）の人の話

## ②生徒が農家の人にインタビューをする

近郊農業を理解するために、本校所在地である市川市の農家に生徒が直接出向き、農作業の現場でインタビューし、取材したことをクラスで発表する体験である。「近くに住宅地があるので、農薬をまいたり、肥料のにおいがしたりすることが問題になりますね」「土地にかかる市の税金が高いので、そのことも考えて農業経営をしていかなければなりません」等、農家の方の心配や悩みを具体的に学ぶ機会となる。取材した生徒も発表を聞いた生徒も身近な例から「近郊農業」の意味を自分なりに一般化、抽象化していく。取材した生徒にとっても学び方を学び、ものの見方や考え方を広げていく。また、学校外の人と直にふれあう貴重な体験であり、コミュニケーションスキルにもなる。

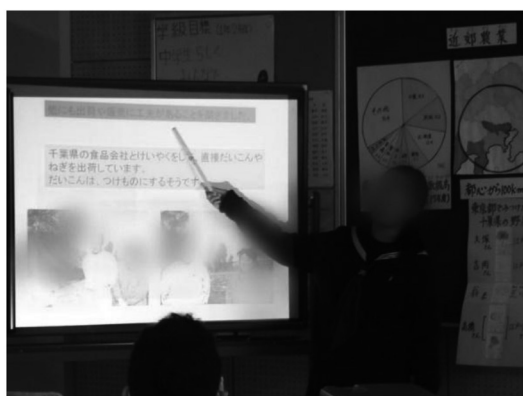


図 16 生徒が農家の人にインタビューする

## (4) 読み取る視点を明確にする

### ①資料を単純化する

教科書の資料を活用する事例である。教科書は、共通の教材であること、何度でも活用できる身近な教材

であること、優れた内容であること等が考えられるが、資料によっては時間内に情報を読み取るには困難な場合がある。

図 17 の資料を活用するねらいは、生徒に南アメリカの「言語」と「民族」を読み取らせ、理解させることである。グラフの内容を2つに分けて単純化すると、具体的で分かりやすい資料になり、配慮を要する生徒も読み取ることができる。

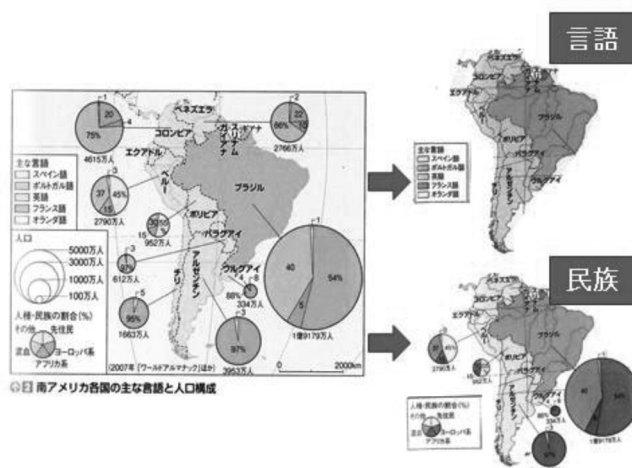


図 17 資料を単純化する

### ②歴史人物カードに情報をまとめる

歴史の授業の資料として、人物に関わるできごとを紙板書にまとめた視覚教材である。人物の業績や足跡を扱う時に、教科書や資料集では人物画や顔写真を掲載していることが多い。カードには、拡大したこれらの人物画や顔写真、おもなできごと等重要な内容をコンパクトにまとめている。授業の最初に提示すると、生徒に強いインパクトを与え学習内容の定着に結びつきやすい。

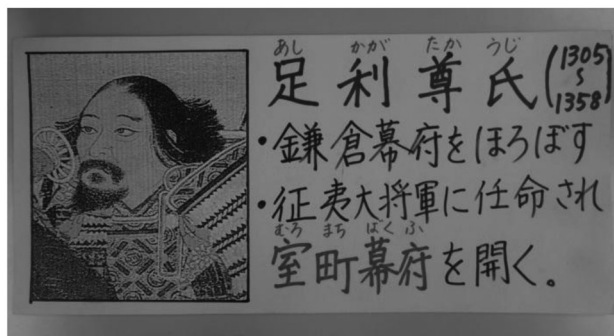


図 18 歴史人物カード

## (5)生活体験から得た知識を活用して思考力を育む

## ①修学旅行で京都へ行く

## ～言語面で配慮を要する生徒の成功体験の事例～

関西の祖母の家に何度も行った経験から、修学旅行で行った京都までの新幹線が通る都道府県名を順番に答え、路線を白地図に書きあげた。全問正解はこの生徒だけだったので、周りを驚かせた。理由を尋ねると、「駅の看板で名前を覚え、お母さんが今どこを通っているか、教えてくれた」とのこと。幼少期にパズルで都道府県名や形を覚える経験もしている。繰り返し体験したことは、しっかりと記憶されていることが分かる。まわりの生徒たちからも「Aちゃん、すごい!」と褒められた。友だちに認められ良い評価を得るという成功体験は、自ら考えることの重要性や考える喜び、楽しさを味わう機会となり、思考の活性化と思考力の向上につながると思う。母親の支援があつてこそ知識が定着したと言える。体験を積むこと、丁寧に具体的におこなうことが重要である。

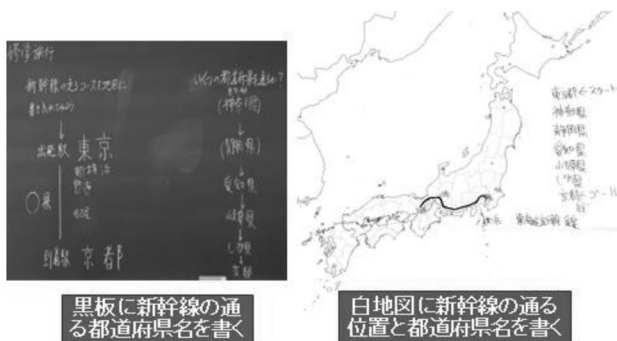


図19 新幹線の通る経路(生徒Aの板書とノート)

## ②私のふるさとをみんなに知ってもらう

沖縄出身で寄宿舎生活をする生徒の成功体験の事例である。ふるさと沖縄について、家族と連絡を取りながら、質の良い内容にまとめ、クラスで発表した。友だちからは「沖縄に行きたい」と言われ、ほめられ認められる体験をした。学ぶ楽しさや伝える力を育むよい機会になった。

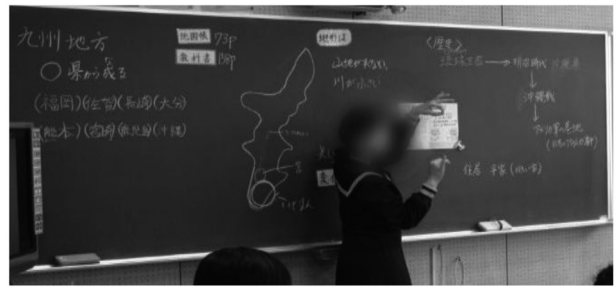


図20 私のふるさとについて発表する

## (6)重要なことばを抽出する

## ①教科書のたくさんの情報から重要な情報を抜き出す ～言語面で配慮を要する生徒の事例から～

授業の中や授業後の見直しの時に「大切なところをマーカーで線を引こう」と声をかけている。生徒の考えや思考を表現するためのツールとして教科書の大切なところに線を引かせている。

言語面で配慮を要する生徒は、「1年生の時はこれも大事な、あれも大事なと思って引きしました。(3年生の)今は、本当に大事だと思うところに引いています。」と答えてくれた。(図21)のように1年生の時は、ほとんどの文字に線引きが見られるが、3年生では、太い文字を中心に重要語句を把握していることが見て取れる。生徒が言う「本当に大事と思う」ことが、思考をしていることであり、選ぶ力が働いていると言える。



図21 教科書から重要な情報を選ぶ

## ②タブレット PC で新聞記事を読み考える力を高める

## ～「ハンセン病患者・回復者」の記事を読み、心に響く言葉をワークシートに抜き出す～

中学部の間に、記事をじっくり読むという体験をし、社会的なものの見方・考え方を育てたいと考え



る。新聞は読む人が減ってきているが、広い紙面に目を通した時の心の安定感や沢山の情報の中から取捨選択する力をつけたいと思い、新聞の切り抜きは授業や掲示用として日常的に欠かせない。一方、デジタルスクラップブックをタブレット PC で読む体験も取り入れている。両者の良さを大切にし、授業の目的に応じて活用方法を選択している。

公民の授業で「ハンセン病患者・回復者」の新聞記事の切り抜きをタブレット PC で読み、ワークシートに「心に残る言葉」を抜き書きし、自分の考えを500字程度にまとめ、新聞社に投稿してみた。2名の記事が東京新聞に掲載された。新聞記事の内容に引きつけられ、自分の体験に重ねて書いている。学んだ知識を、自分の言葉で表現し、新聞に働きかけた結果、新聞社に評価された。この体験は、新聞をより身近なものと感じるとともに、自信につながるものであると思う。

今回タブレット PC を活用しての生徒の感想による利点は、「便利である」「拡大出来たり、書き込んだり出来、自分のペースでゆっくり読めるからよい」「同じ資料を一齐に閲覧でき、時間短縮になる」

「保存の必要がなく操作が楽」等である。一方、「タブレットも良かったが、パソコンのインターネットでそれぞれ違う内容を調べた方が良かったと思う」との意見もあった。教師側からは、「生徒の学習意欲を高めることができる」「広い紙面を一つにまとめることができる」「瞬時に必要な情報を読むことができ」「読み直すことも容易である」「教材を保存するのに便利である」等の利点を感じている。



図 22 新聞記事を読み、新聞社に投稿する

## 5 社会科学習指導上の工夫

### —授業づくり—

(1) 1年生の歴史の授業「奈良の都と下総国で暮らす人々」

①自由に考えを述べ合える集団作りに努める

ア 全員参加の授業であること

1年生の7月に行った授業である。小学部からの生徒に他の聾学校からの入学者が加わり、互いに刺激を受け合いながら少しずつ中学部生活に慣れて来ている。この時期では、自分の気持ちや考えを自由に表現できることを重視している。授業では、電子黒板に映された上級生の作品を見ながらやりとりをとおして、古代の千葉県の特産物を理解している。

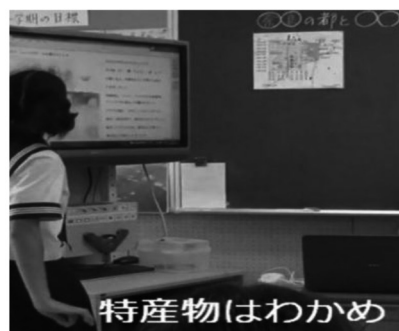


図 23 全員が発表する場面をつくる

イ ふき出しの言葉を考え動作で表現する

自分の言葉で自分の考えや気持ちをうまく伝えることができにくい生徒は、奈良時代に税で苦しむ農民の様子を動作で表現する。

ウ ふき出しの言葉を考え役割演技で理解を深める



図 24 協力して役割演技をする生徒

図 24 は、税を取り立てる里長と税に苦しむ農民の立場に立ち、気持ちを想像しながら役割演技をしているところである。演技をする生徒も演技を見ている生徒も演技をとおして、この時代の人々の暮らし

を理解するために取り入れた方法である。生徒が恥ずかしがらないで、楽しんで演技をするのは、幼稚園・小学部期に素直に表現できるように経験を積み上げてきたからだと思う。演技をした後は一人一人が吹き出しの言葉をノートに書き、当時の人々の気持ちを想像し文字で表現した。

## ②板書の工夫

空欄作り・ふりがな・図式化・絵・文字カード  
拡大コピー等

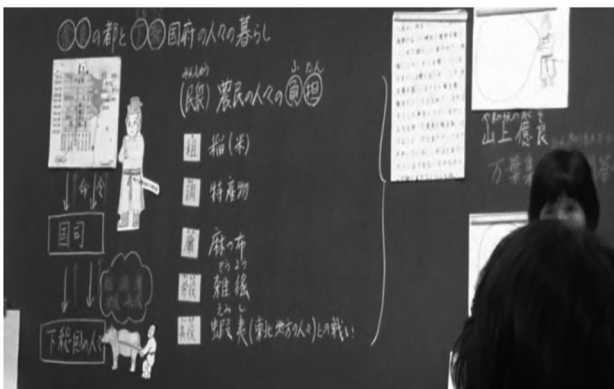


図 25 板書の様子

教師は、□や○○の空欄を作り、言葉を考えさせていくことで推測させたり想像させたりする。また授業の中で漢字の読み間違いが起こりやすいという聴覚的なハンディを考慮しふりがなをよくつける。正しく読む習慣をつけるには、教師が曖昧さをゆるさないという姿勢が大事だと思う。内容はイメージしやすく理解しやすいように図式化する方法もある。図 25 の例では人物画と社会的身分との関係を矢印により視覚的に捉えやすく表している。文字カードは、重要な語句に注目させたいり板書の時間を短縮したりする役割がある。教科書の資料は拡大コピーをし、共有化することで話し合いを活発にすることができる。

## (2) 3年生の公民の授業「持続可能な社会の実現をめざして」 ～支援する国と支援される国～

### ①意見を共有し、話し合いを活発におこなう

生徒同士が顔を見ながら話ができるように机の配置が馬蹄形になっている。友だちの発言を見ていな

い生徒には「○○さん何て言った？」と尋ね、答えられない時は、「では、もう一度言ってあげて」と言い、発言内容を確認し、共有するようにする。話し合いを活発にするために、「カンボジアってどんな国だと思いますか？」と、どんな意見も認められるような広がりのある発問から始める。



図 26 カンボジアについて知っていることを話し合う

## ②資料の提示方法・活用方法

### ア 実物を活用する



図 27 実物のカボチャを使って考えを引き出す

授業の導入で生徒の興味関心を喚起させるために、「カボチャ」の語源が「カンボジア」であることを取り上げた例である。実物のカボチャを見せて「約500年前にポルトガル人は日本に来て、『○○の国で作られたカボチャです』と伝えました」と言い、続いて「カボチャ・カンボチャ・カンボジア」とリズムよく発音することで国名を引き出させていった。聴覚に障害のある生徒も補聴器をとおして言葉のリズムを楽しむことができる。

### イ タイムリーな情報を活用する

生徒にとって身近なスマートフォンを学習教材として活用する。





図 28 市川市とカンボジアの気温を比べる

### (3) 2年生の地理の授業「オランダについて学ぼう」

#### ①生徒の実態に即した教材であること



図 29 黒板は手作りの資料で満載

授業づくりの中で失敗した事例である。自分が良いと思うものは、伝えたい、理解してほしいと思うのは、教師の宿命かもしれない。視覚的な教材をたくさん作った。生徒の前に提示すればするほど、生徒はだまりこんでしまったのである。研究授業であっただけに、その時の恥ずかしさと生徒に申し訳ないと思う気持ちで一杯になったことは忘れられない。それからは、何をどう教えるかを明確にし、言葉のやりとりとそれを支える教材・教具を精選する努力をしている。

### (4) 思考を深めながら生徒と板書をつくる

#### ～2年生の地理の授業「ブラジルを学ぼう」～

##### ① 員が参加できる授業づくり

チョークの使い方は、生徒との約束で色を決めている。私の場合は、基本は白、重要語句は赤、注意する言葉は黄色としている。また、話しのやりとりの時と板書をノートに写す時はしっかり区別させて

いる。書く時間はできるだけ短くするように促している。

題名は、一部分だけ教師が板書をし、続きは生徒たちで考えて決める。図 30 の授業で教師は「今日はブラジルについて学びます。さあ、今日はどんな発見があるかな。」と言いながら黒板には「ブラジル」としか書かない。授業では全員が発表する機会を作っていく。配慮を要する生徒は、日本とブラジルの面積の大きさを比べたり、グラフから「言語」や「民族」を読み取ったりしたことを黒板に書くことができる。

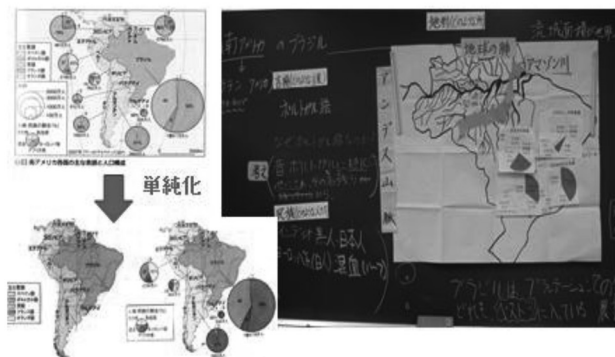


図 30 生徒とつくった板書の様子

##### ②授業の主発問は前もって決めておく

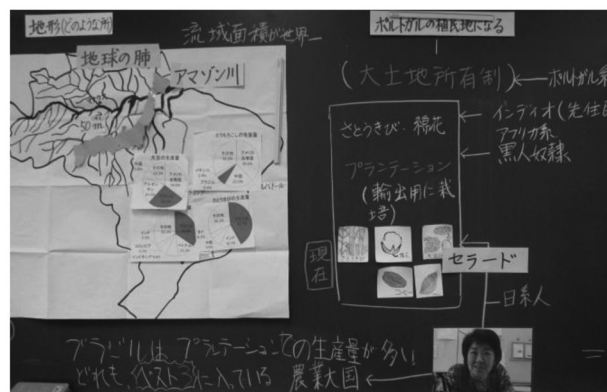


図 31 生徒とつくった板書の様子

授業の主発問は、「ブラジルはなぜ、作物の種類が限られているのでしょうか？」にした。大土地所有制、プランテーション等学習したことを引き出し予想し考えていくことをねらった発問である。配慮を要する生徒が黒板に「ブラジルはプランテーションでの生産量が多い、どれもベスト3に入っている。」とまとめた。ここまで書け

たことに驚いた。東南アジアを学んだ時の知識が定着していたと見て取れる。

### ③授業のまとめをノートに書き提出する

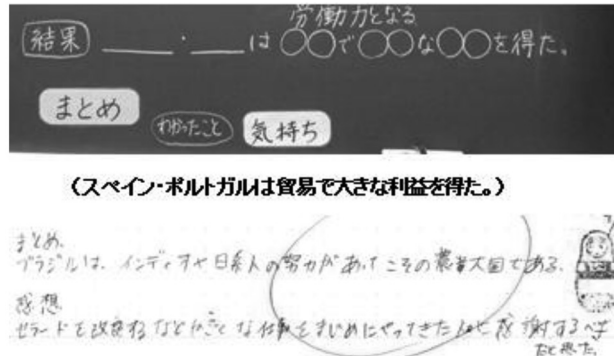


図 32 生徒のまとめ（個別ノートから）

図 32 の空欄にあてはまる言葉を全員の生徒で考える。次に本時の題名「ブラジル\_\_\_\_\_」に続く言葉を考える。話し合った結果「ブラジルは、日系人の努力があつて農業大国となった」に決まる。

各自の社会科のノートに、自分の考えを文でまとめ、授業終了後に提出する。教師はその日のうちにコメントを書いて返却する。

### (5) 生徒の実態に即した発問の仕方

#### ①授業の流れをつくり思考力や判断力を育てる

##### ア 何を問うているのかがはっきりしている

短くかみ砕いた言葉ではっきり言うこと。

##### イ ピンポン型よりバレーボール型にする

一問一答だけではなく、生徒からいろいろな意見が出るような問いかけをする。

##### ウ 主発問は、教材研究の過程で決めておく

なぜ？は、目指す方向が明確になる。

##### エ 生徒の認識や思考を揺さぶり、新たな知識を形成するきっかけとなる問いかけをする

T「選挙権は何歳からですか？」

S「20歳！」

T「そうですね。では、選挙権は何歳までありますか？」

S「90歳」「80歳」「70歳」「60歳」

「死ぬまで」の5とおりの答えが返ってきた。

### オ 発問と解答は一致すること、一貫していること

生徒の発言に流されると、発問が消えたり、発問と解答が一致しなかったりすることがある。ずれが生じた時は、流れを正し、筋のとあった思考をさせるようにする。

### (6) 専門家から学ぶ

#### ～下総国府を学ぼう～

#### ① 生徒が主体的に取材し、まとめ発表する

奈良・平安時代に本校所在地である市川市国府台には、国府（今で言う県庁のような役所）が置かれていた。この地域の歴史を学ぶため、地域学習「下総国府を学ぼう」に取り組んできた。総合的な学習の時間を活用した。フィールド調査をし、調べ、専門家に質問し答えてもらう、各自でテーマを決めて専門家や保護者の前で発表する、遠隔地の大学生とスカイプで交信しアドバイスをもらう等いろいろな活動をした。博物館と学校が連携したこの学習は、生徒が自ら課題を見つけ主体的に課題解決に向けた取り組みができる。

専門家との学習は、「学び方やものの考え方を身につけることができる」「コミュニケーションスキルの場になる」「表現力を高めることができる」「学習成果を社会科の教材として活用できる」等のメリットがある。



①フィールド調査



②質問に答えてもらう



③テーマを決めて発表



④大学生とスカイプで交信

図 33 「下総国府を学ぼう」への取り組み

### 6 社会科学習指導上の工夫 ー個別ノートー

#### (1) 生徒一人一人の社会科ノート



生徒は、社会科の授業後に毎時間授業のまとめをノートに書いて提出する。分かったこと、感想、考えたこと等を書く。記述内容から、①授業中理解した内容、②自分の感想や考え、③学んだ事をもとに考えを発展させる、の3段階に分類することを試みた。例えば、図34のように1年生の記述内容は、入学後2カ月が経過したばかりであり、①段階（3名）②段階（4名）に該当する内容である。

1年生 題材：赤道に沿った暑い世界(熱帯気候)  
2015年6月3日

①学んだことを書く。 (3名)	赤道近くにある国は、気温が高い。赤道からはなれて北回帰線と南回帰線に近い所は乾季になる。等
②学んだことについて自分の感じたことや考えを書く。 (4名)	アマゾン川の近くの様子が知れて良かった。アマゾン川の近くで生活している人は、とてもすごいなと思った。等
③学んだことについて、筋道を立てて書き、さらに思考を高め、考えを発展させる。 (0名)	

図34 1年生のノートのまとめ

2年生になると記述内容にも変化が見られる。対象生徒が異なるので参考程度であるが、図35のようにこの授業では、②と③段階に該当している。②は過疎化対策についてみかん農家の人への提案が書かれている。③段階では、授業で学んだ内容に、新聞やテレビ等から得た情報を加え、自分なりに過疎化の問題に向き合っている。社会を捉える視野を広げ、授業から得た知識を活用し、自分の考えをつくり上げていく力が育っているように思う。

2年生 題材：中・四国地方の過疎化  
(みかん農家を例に考えよう)

①学んだことを書く。 (0名)	
②学んだことについて自分の感じたことや考えを書く。 (5名)	若い人が好きな甘くて酸味があっておいしいみかんのゼリーやキャンデーを作っておもてなしするともっと働きたい人があると思う。等
③学んだことについて、筋道を立てて書いたり、話したりすることで、さらに思考を高め、考えを発展させる。 (2名)	この前ニュースで「一票の格差」というのを見た。過疎化というのは後継者不足だけではなく、政治的な問題を引き起こすことがあると分かった。地方ならではの、良さというものを皆に知らせることが大事だと思った。等

図35 2年生のノートのまとめ

## (2) 配慮を要する生徒の家庭学習用ノート

言語面で配慮を要する生徒を個別に支援した事例である。課題を家庭で行い、翌朝「個別ノート」として担当者に提出することを3年間継続しておこなった。

### ① 年時（事例：プリントによる家庭学習）

大陸や海洋の名前は書けるが、球状の地形から大陸や海洋を正確に認識するのは困難であり、図36のような課題では知識の定着が見られなかった。文字を中心とした課題のプリントは、写し間違いや、見落としのミスが多く、一人では正確な解答をつくるのが困難であった。母親からは、「『一緒に見直そう。』と言うと小学部の頃とは違い反抗する。」という報告を受けたので、「『個別ノートやってる?』とだけ毎日声をかけてください。」とお願いした。

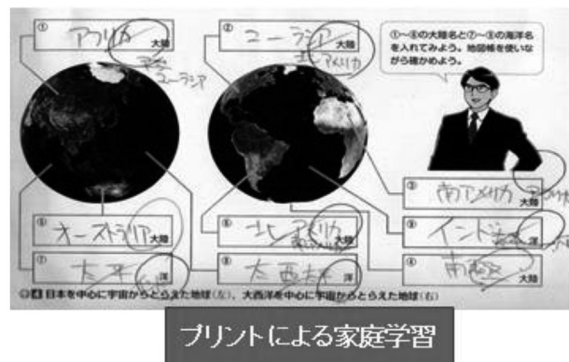


図36 1年時の「個別ノート」から抜粋

### ② 年時（事例：生徒自作による問題）

家庭での「個別ノート」の内容について、「地図はよく分からないけど、文を書くことは好きだから、文で書く問題ならできる」と、生徒自ら考えを言ってくるようになる。他の生徒がおこなっている方法を見て、取り入れようと思ったのであろう。一度に行う量や内容は、生徒の気持ちを尊重し話し合いながら決めていった。

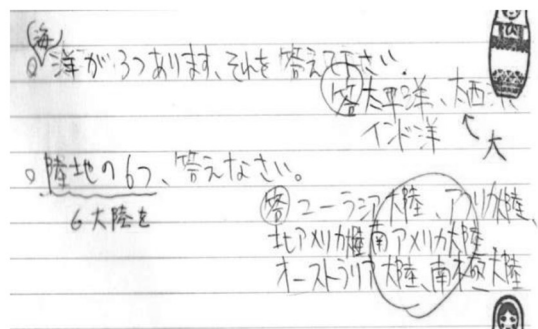


図37 2年時の「個別ノート」から抜粋

### ③3年時（事例：自学の方法を身につけ、学びを楽しむ）

図 38 は、歴史の自作問題である。苦手意識のあった地図を描いて、表現にも工夫が見られる。3年生になると、家庭学習を一日も欠かさないで行い「個別ノート」を提出するようになった。受験勉強をかねて「教科書2ページ分ずつ自分の興味あるところから選び、一日5問作り解答も書く。」ことを話合うと、卒業式の前日まで続けた。

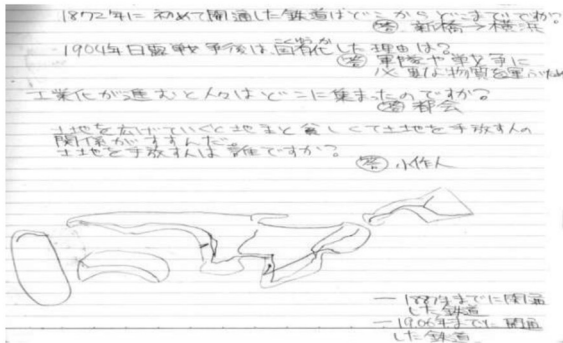


図 38 3年時の「個別ノート」から抜粋

家庭で支援し続けることがいかに大切であるかが分かる。幼稚部の時から、教師と共に子どもの成長を見守ってきた母親の強く大きな愛情を思う。教師は毎日地道にこつこつとノートをとおして、できるだけ生徒の内面に届くようなコメントを書き続けることが大切であろう。

この生徒の場合、語彙力・構文力検査（LDTR）で見ると、飛躍的に伸びている。9歳レベルの壁を越え、論理的で抽象的な思考を身につけることができる領域に立つことができたと感じた。

## 7 おわりに

何をどのようにやればいいのか分からないまま、先輩たちに教えを請い、無我夢中で手探りでやってきたのが私のろう教育であった。はじめて教壇に立った通常小学校に、もしもう一度戻るとすれば、あの時の100倍も1000倍も丁寧に教えてあげることができる気がする。井上ひさしさんが「むつかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」ということばを残しているが、教育一般、特に聴覚障害児教育の学びの本質をも語

っているように思う。苦勞して自分の教える道を模索している教師は、実際の指導を重ねるほど「そういうことなのか」とか、「面白い、もっとやってみよう」というふうにならずに自信を持って前に進んでいくことができる。

教師自身が大切に培ってきたことに自信を持って日々の教育の中で活かしてほしい。部活から学んだことでも良い、ボランティア経験から学んだことでも良い、どの分野でも良いと思う。生徒は、指導技術もだが、前向きな向上心のある先生により惹かれる。私自身、魅力ある授業を一度でも多く成功させるために今後も努力していきたい。

### 〔付記〕

本研究は、平成27年度(2015年)聾教育実践研究会 講義Ⅳ「中学部における社会科指導」で発表した内容に加筆したものである。

### 〔参考文献〕

- 1) 藻利國恵(2015) 中学部における社会科学習指導上の工夫 ―個に応じた取り組み― 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 37 46-53.
- 2) 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2010) 『教科指導と読み書き・ICT活用―中学部における実践事例―』聾教育研究会
- 3) 藻利国恵 武井順一(2005) MUSEUM ちば千葉県博物館協会研究紀要, 36 12-15.
- 4) 駒見和夫 伊藤僚幸 藻利國恵(2007) 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, 11 9-15.
- 5) 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2012) 平成24年度(第39回)聴覚障害教育担当教員講習会中学部資料『学習指導の工夫とICT活用 ―続・中学部における実践事例―』電子書籍